体験的香港ビジネス事情

公益委員　長野信弘

１９９１年４月から３年間、県の駐在員として家族４人で香港に暮らした。文化・スポーツ、青少年交流など、鹿児島と香港の多彩な交流の橋渡し役として、忙しくも充実した毎日を過ごした。この時期、日本はバブル崩壊に見舞われていたが、９７年の中国返還を間近に控えた香港の経済は絶好調、株価は３年の間に急伸して３倍以上になった。

「白い猫でも黒い猫でもネズミを捕まえてくれさえすればいい猫だ」（社会主義にこだわらず、市場経済原則を導入して儲かればいい）と語った鄧小平が、深圳や上海を視察して歴史的な「南巡講話」を発表したのが９２年の旧正月。以来、中国は改革開放路線をひた走り、鹿児島県が駐在員事務所を置くジェトロ香港センターには、香港に隣接する深圳経済特区など華南経済圏を一目見たいという、日本からの視察団が殺到することとなった。

アヘン戦争でイギリスの植民地となった香港は、ビジネスは万事西洋流。損か得か、経済合理性がすべてに優先する。県市長会から香港のコンテナヤードを視察したいというアポ取りの依頼があった時のこと。日本と異なり、香港では民間が港湾施設を所有・運営している。最大手の会社に打診したところ、「鹿児島の市長さんたちの視察を受け入れて、当社に一体何のメリットがあるのか」という直球の質問が返ってきた。

ビジネスにつながらない行政視察に時間を割くのは真っ平ということらしい。いかにも香港流だと感心したが、さりとて駐在員としての役目を果たさなければならない。思案の末、商船三井の知人を経由して再度、受け入れを依頼してみた。大事なお得意先から紹介されたお客様となれば、ビジネス上、断れないのではないかと踏んだのだが、案の定、会社の態度は一変、視察当日は満面の笑顔で出迎えられ、至れり尽せりのガイド付き社内見学ツアーで案内してもらった。

香港社会は女性の職場進出が進んでいて、夫婦共働きは当たり前。実力さえあれば、年齢・性別に関係なく責任のある仕事を任される。それを支えるのが住み込みで家事仕事を担う“アマさん”と呼ばれるフィリピンからの女性出稼ぎ労働者。９１年当時、約６万５千人もの数を数えた。日曜日ともなれば、セントラル地区の公園はアマさんたちの一大集結地となり、タガログ語が飛び交い、周辺に出店が出るほどの賑わいとなる。

日本人駐在員家庭の中には、住み込みのアマさんは無理でも、通いのパートタイムなら頼んでみようかと果敢に挑戦する人がいる。ただ、これまでの日本の暮らしでハウスメイドを雇った経験なんかないので、どう接していいのか勝手がわからない。いつになく朝早くから部屋を片付け、掃除に励んでいる奥さんに向かって「誰かお客さんが来るの？」と尋ねたところ、返ってきたのは、「今日はアマさんが来る日だから、きれいにしておくの」だったと言う。

香港住民の大多数は、もとを辿れば中国国内の戦乱を逃れてきた避難民の末裔であり、香港政府による自由放任主義の下、経済合理性をとことん追求する。一方、伝統の“白髪三千丈”、つまりは“ハッタリをきかせる”文化も受け継いでいて、隣に立つマンション群の隙間から細長い海が見える部屋が、堂々たる“Sea View Room”となる。

各県の駐在員仲間１０数名で懇親会を企画した時のこと。「ラマ・ヒルトンでディナー／クルーザーで送迎／船内ドリンク付き／一人３００香港ドル」という宣伝文句に惹かれて申し込んだ。聞けば、駐在員の誰一人、香港のリゾートと呼ばれるラマ島に行ったことがない。“瀟洒なラマ・ヒルトンホテルでのディナー”への期待に心を躍らせて、指定された港に全員集合した。夕陽に輝く真っ白なクルーザーが数隻停泊している。爽やかな潮風を浴びながら、デッキでカクテルグラスを傾けたら、どんなにいい気分だろう。

しばらくすると、くすんだ色の小さな舟が視界に入ってきた。気のせいか、だんだん近づいてくるような気がする。「まさか、あれじゃないよね」などと言い交わしていると、舟上の人影がこちらに向かって大きく手を振った。舟に乗り込む際に各自１本ずつ缶ビールを手渡される。どうやら、これが「船内ドリンク」らしい。小さな窓の付いた舟底の部屋に案内され、皆で一つのテーブルを囲んで、言葉少なく缶を開けて飲み始めた。

ビクトリア湾は船舶の交通量が世界で最も多いと言われていて、おびただしい数の船が往来する。その中を縫うように、我らが小舟はラマ島を目指すが、大型船が近くを通るたびに横波を受けて大きく揺れて傾き、全員慌ててテーブル上を滑り行く缶ビールを押さえる。“木の葉のように揺れる”というのは、こういうことだと実感した。

ようやくラマ島に到着すると、浜辺に海の家のような建物がずらりと立ち並んでいた。ラマ・シャングリラ、ラマ・ハイアット、ラマ・マリオットなど有名なホテル名を冠した、店本体よりも大きく見える看板がライトアップされて、夜空に明るく輝いている。呆然と立ち尽くす駐在員たち。言うまでもなく、ラマ・ヒルトンもその一角にあった。

落ち着かない気分でラマ・ヒルトンのテーブルを囲む。目の前に矢継ぎ早に運ばれてくる大皿の料理。おそるおそる口に運ぶと、・・・うまい！さすがはグルメ天国香港。ほかのことはともかく、料理だけは外さない。一同、ようやく人心地ついて、「香港駐在員たるもの、謳い文句を真に受けてはならない」という教訓を、ラマ島の海鮮料理とともに噛みしめながら、波乱万丈の一夜はいつしか上機嫌のうちに過ぎていった。

以上、30 年前の懐かしい思い出話である。最近、香港のニュース映像を見る度に胸がきりりと痛む。現実的でしたたかで、自由気ままを愛する香港の人たちは、一体どんな思いを抱えて毎日暮らしているのだろう。
空の上では、鄧小平がつぶやいているに違いない。「香港の猫は賢くて、放っておけば上手にネズミを捕まえる。余計な手かせ足かせは、猫の仕事の邪魔をする」。